

西欧中世文書の史料論的研究：平成23年度研究成果 年次報告書

岡崎，敦
九州大学大学院人文科学研究院：助教授

ドリュモー，ジャン＝ピエール
レンヌ第2大学：元教授

高橋，一樹
国立歴史民俗博物館：准教授

城戸，照子
大分大学経済学部：教授

他

<https://hdl.handle.net/2324/1932630>

出版情報：2012-03
バージョン：
権利関係：

現代アーカイブズ理論と西洋中世史料論研究

岡崎 敦

はじめに

20世紀末にいたって、歴史学の実証基盤が問われると同時に、「記憶」に関する問題系が一世を風靡したことはよく知られている。そして、本稿で取り扱うアーカイブズへの関心の高まりも、これとまったく無関係ではない。本稿では、現代アーカイブズ理論と西洋中世史料論研究の遭遇の可能性を検証することを試みるが、これに先立って、現在の「史料論」研究の重要な論点を確認しておく必要がある。

第一は、史料（類型）の「存在論」とも言うべきもので、そこでは、史料の真偽や信頼性の鑑別を旨として、その内容や形式を検討する「史料批判」をもっぱらとしていた「史料学」に対して、史料の存在の意味と論理自体を考察することが課題となった。この際、個々の史料のみならず、史料の類型自体のあり方が重要であり、特定時代の特定時期の特定人間社会による世界・人間・社会認識の「型」が、「史料（類型）」というかたちに「表象」されていると考えるわけである。第二の論点は、史料の「機能」や「伝来」に関わる。私たちが現在認識する史料「情報」や「現象」とは何かを考えると、それらを「史料それ自体」とは同一視できない局面が認められる。ある史料の「意味」とは、静態的に分析されるコンテンツだけではなく、史料をめぐるさまざまな状況や権力関係、すなわちコンテキストにおける「機能」抜きでは理解し難い。また、現在私たちが目にしている史料は、しばしば長い歴史過程のなかで、多く場合、その生成とは異なるコンテキストのもと、保存、管理されてきた、つまり「多様な時間が降り積もった」結果なのである。第三は、「史料」と歴史家との関係である。「史料」を、歴史学が過去の研究のための素材として認識する対象すべてと考えるとき、当然ながら、解釈のみならず、いわゆる実証手続き自体もまた、歴史家の特定のまなざしのもとに置かれる。史料刊行、校訂という、一見「客観的」とされる手続きにおいても事態はまったく同様である。

以下、まずアーカイブズ学の視点が、これまで中世研究のなかにどのように活かされてきたのかを簡単に概観し、ついで、現代アーカイブズ理論の代表例として、レコード・コンティニューム理論を紹介し、その意義を考察する。最後に、この観点から、あらためて西洋中世史料論研究の現状を再検討したい。

1. アーカイブズ学の視点と西洋中世史料論研究

「記憶」の問題系は、なにより脱構築として提示、研究されてきたといえよう。この際、「すべての史料は、記念碑 *monument* である」（トゥベール）との標語のとおり、記述史料のみならず、アーカイブズ資料をはじめとする実務資料もまた、「現実表象」と「記憶の構築」の手段として把握されるに至った。西洋中世研究におけるカルチュレールをめぐる一連の議論は、そのもっとも分かりやすい例の一つである。そこでは、権利証書をはじめとする実務文書の、後世における体系的な転写事業がはらむ「記憶の構築」的性格が、さまざまな観点から論じられ、アーカイブズの形成、変容過程自体が、単なる伝来論から自立した独自の研究対象となった。

他方で、実務資料の伝来やアーカイブズ形成について自明視することなく、このためにはどのような諸条件が必要とされるのかについて、比較史的な観点から研究が行われた結果、主要な論点が整理、提示されるに至っている。資料が保存されるには、まず意志や目的が必要であるが、それは実務上のものとは限らず、広義の歴史編纂に至る多様な状況が存在した。他方、とりわけ長期にわたる資料の保存は、これを可能とする物理的諸条件なくしてはありえなかった。とりわけ重要なのは、イエや神社・教会に代表されるような「組織や機関」のあり方であるが、さらに、資料の価値を支える法規範や権利の法理、および実際上の安定性も無視できない。最後に、資料、あるいはその記憶の保存のた

めに開発されるさまざまな技法や、これと関係する資料情報の再編問題がある。事実、ある資料は、具体的な歴史過程において、コピー、要約、目録化、歴史編纂、儀礼などへの取り込みなど、さまざまな処理を蒙ってきた。

最後に、史料伝来の「近代的」諸問題がある。文書形式学や文献学をはじめとする「近代的」学問方法論は、すでに前近代に出現していたが、それらの研究の素材となった中世のアーカイブズ資料は、当時まだ「生きていた」。学問研究の過程で行われた膨大な資料蒐集と刊行は、政治的、法的闘争から史料を引き剥がす試みであったとも言える。同様に、近代的文書館は、そもそも市民のための情報公開と提供サービスの機関として、フランス革命のさなかに誕生したが、ほどなくして、資料を「(文書館へ) 生み出す」原局との関係を希薄化させ、歴史学の素材提供機関へと変質していく。アーカイブズ資料もまた、かつては建築の一部であった彫刻やステンドグラスが博物館に陳列されるのと同様、存在の本来のコンテキストから引き剥がされて、文書館や図書館に収まったのである。

近年の史料研究の一つの焦点こそ、資料が経てきた歴史過程そのものへの関心であり、その方法論は、しばしば好んで「資料の考古学(現在までの間に、資料に積み重なってきた歴史の痕跡を、発掘で層をはぐように弁別する)」とも呼ばれる。以上のような資料伝来と再編の過程に注目すれば、これは同時に「史料認識の考古学」でもあるだろう。

2. レコード・コンティニューム理論

しかしながら、中世史料論研究へのアーカイブズ学の寄与は、以上にとどまらない。ここでは、レコード・コンティニューム理論を紹介し、その持つ意味を検討する。

レコード・コンティニューム理論とは、オーストラリア学界で1980年ごろから研究が積み重ねられてきた資料情報管理に関する理論である。レコードマネジメントについて定めたオーストラリアの標準規格AS 4390を経て、2001年に国際標準機構制定のISO 15489にも影響を与えており、日本でも、2005年、JIS X 0902-1「情報及びドキュメンテーション—記録管理—」が、国際標準に準拠して制定された。オーストラリアの文書館では、「レコードキーピングシステムの設計と運用 Designing and Implementing Recordkeeping Systems (DIRKS)」として実装整備が進むなど、理論、実務の双方で注目を集めている。ここでは、この理論の最近のもっとも重要な論者の一人であるアップワードの議論を、1996年の代表的論文をもとに紹介する。

アップワードが、この論文で初めて提示したモデル図は、中心から外へ広がる4つの次元と、これを縦横に区切る4つの軸を持つ円形からなる。

次元 dimension は、中心から外部へ向かって順に、第1の「発生 create」、第2の「補足 capture」、第3の「組織化 organize」、第4の「多元化 pluralise」と広がる。軸 axis は、横軸について、右には「行為 Transactional Axis」、左には「主体軸 Identity Axis」、縦軸は、上に「証拠軸 Evidential Axis」、下に「記録保存軸 Recordkeeping Axis」が表現される。この両者を組み合わせると、以下のとおりとなる。

「発生」次元：「行為 Acts」、「行為者 actor」、「表現形跡 Representational Trace」、「資料 Document」

「補足」次元：「活動 Activities」、「組織単位 Unit」、「証拠性 Evidence」、「レコード Records」

「組織化」次元：「機能 Functions」、「組織 Organisation」、「組織記憶 Organisational Memory」、「アーカイブ Archive」

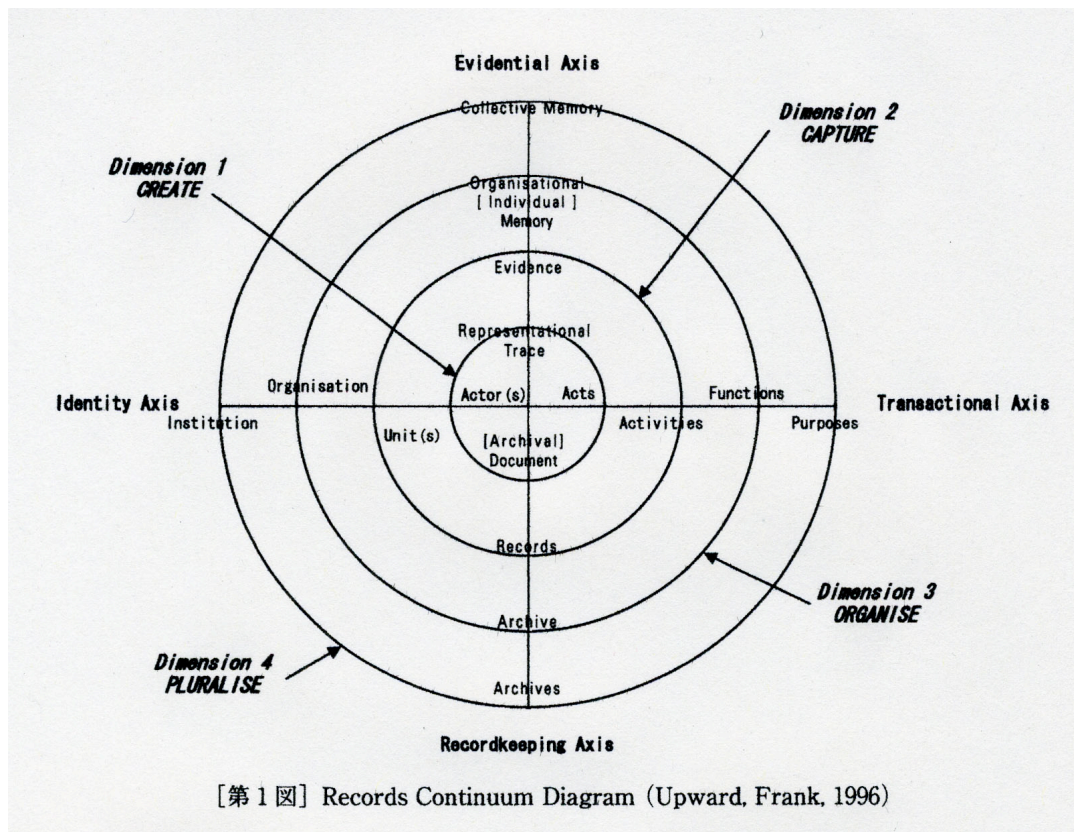
「多元化」次元：「目的 Purposes」、「制度 Institution」、「集合記憶 Collective Memory」、「アーカイブズ Archives」

「行為軸」：「行為」、「活動」、「機能」、「目的」

「主体軸」：「行為者」、「組織単位」、「組織」、「制度」

「証拠軸」：「表現形跡」、「証拠性」、「組織・個人記録」、「集合記憶」

「記録保存軸」：「資料」、「レコード」、「アーカイブ」、「アーカイブズ」



[第1図] Records Continuum Diagram (Upward, Frank, 1996)

レコード・コンティニューム理論の最大の特徴は、20世紀後半のアメリカで提唱され、国際標準化していた現用文書（レコード）と非現用文書（アーカイブズ）の対立モデルを否定して、資料の原局における生成から、組織を離れた公共空間で新たな歴史的価値を持つまでのすべてを、一つの過程として統合的に理解し、これに対応する管理を提唱することにある。この背景には、ポーンデジタル資料の一般化による、資料保管の物理的環境の根本的な変容（「ポスト保管」と呼ばれる）があるのはもちろんだが、さらに重要なのは、構造が行為との関係で相互依存的に成立すると考えるとともに、行為主体の主観的意味を解釈学的に取り込むギデنز社会学の直接の影響である。

レコード・コンティニューム理論においては、ある資料は、段階をおってレコードからアーカイブズへ変容するのではなく、そこに関係する主体や行為、観点などに応じて、その都度異なった相貌を表すものとして観念される。このモデル図は、資料の表現というよりもむしろ、資料に関係するコンテキストとプロセスのあり方を、その構成要素の組み合わせとして提示したと考えるべきであろう。

レコード・コンティニューム理論は、それ自体として、構築主義的な意味連環読解の理論としても興味深いが、現代アーカイブズ学、さらには中世史料論研究としても、無視できない射程の広がりを示している。

19世紀に西欧で確立したアーカイブズ学の基礎理論は、資料の「群」として把握、およびそのメタレベル記述であった。アーキビストたちは、原局から移管されてきた資料はもちろん、前近代のいわゆる古文書に関しても、組織や業務のあり方の反映として、資料の内部秩序を分析し、これを物理的、および目録の作成という二重の資料の管理によって保存するように努めてきた。しかしながら、20世紀に入ってから資料の爆発的増加、さらには近年のポーンデジタル資料の一般化は、古典的な意味での資料（秩序）の保存を困難としていた。さらに、フォンやセリーの前提であった組織や業務の安定性は、時代を経るごとに崩壊し、とりわけ近年は、流動化が特に著しい。このような状況のもとで、資料管理の根本的な刷新として提示されているのが、レコード・コンティニューム理論である。

といえる。その特徴をまとめるなど、以下の諸点を指摘できよう。

第一に、この理論が把握しようとしているのは、いわば行為と構造の全体なのであって、資料はその他の要素とともにその一部を構成するに過ぎない。「管理」すべきはコンテキストやプロセスそれ自体となれば、極端な場合、資料を作成したり、保存する必要すらないのである。あるいは、むしろ、物理的環境に限界されない、情報処理の無限の可能性を開く可能性がある。第二に、資料やそれを取りまく行為や構造は相互依存の関係にあるという理解からは、実務的な業務資料と「歴史的に価値ある文化財」との区別は、原理的に導きだされ得ない。「歴史的価値による評価選別」は、歴史学的にはあらゆる面から正当化できないが¹、レコード・コンティニューム理論にとっても同様であろう。第三に、この理論は、実務資料だけに対象が限定される必然性がない。「証拠性」軸は、一見アーカイブズ資料に特有のように見えるが、社会的に編成されるあらゆる社会的テキストは、なんらかの規範性を有するからには、この理論は、基本的に、あらゆる行為や主体、構造にあまり適用可能と考えられる。当然ながら、いわゆる図書館や博物館資料に対しても同様であり、私的な趣味や公的な業務の別なく、統合的に情報処理する可能性が開かれている。

3. 西洋中世史料論研究の射程

以上の考察は、西洋中世史料論研究においては、とりわけて重要な認識を提供すると考えられる。本質的に他者、異文化を対象とする歴史研究においては自明なものは何もなく、とりわけ前近代研究においては社会のあり方自体が研究の対象となるがゆえに、しばしば法とはなにか、権利とはなにか、主体とはなにか、といった原理的な問いが繰り返されてきたのである。そこでは、同時に、研究者のスタンスもまた、強く意識されざるをえない。

最後に、最近の西洋中世研究のいくつかを、レコード・コンティニューム理論との関係でとりあげ、その意義を位置づけなおしてみたい。

第一に、合意形成ルールをめぐるせめぎあいと認証プロセスの問題群がある。レコード・コンティニューム理論における「行為」と「活動」、「資料」と「レコード」との関係は、古典的なアーカイブズ学にとって重要な意味を担っていたが、伝統的な歴史学、とりわけ文書形式学と固く結びついた法制史研究においても同様である。組織や社会が法的性格を認めたものだけが文書 *acte* であり、これ以外の（あるいはこれに先立つ）さまざまなやりとりは、社会が責任をもって管理すべきものではないというわけである。しかしながら、20世紀後半から流行した紛争解決研究は、このような「構成された事実」としての法関係のあり方自体について、とりわけ機能論の立場から、再考を促してきたといえる。

たとえば、筆者自身の研究から引けば、パリ司教座教会について、1100年ごろと推定されるナイフが伝来しているが、そこには、俗人の教会への譲渡行為が3人称で記載されていた。ほぼ同様な書式による別の法行為が、12世紀初めに製作されたパリ教会のカルチュレールにも記載されている（13世紀以後のカルチュレールには、もはや見られない）。解釈は微妙だが、このナイフは、少なくとも1100年頃には、俗人にとって法行為の象徴物件、パリの聖職者たちにとっては法的効力を持つテキスト「文書」として、それぞれ異なるやり方で、重層的に理解されていた可能性がある。

また、11世紀なかばのクリュニ修道院に関して、バレは、2つの獣皮紙が一つにくくりつけられた文書について、以下のように論じていた。上の獣皮紙には、俗人による修道院への譲渡が1人称で書かれており、真正な意味での文書であるとみなされると同時に、木の断片が縫い付けられている。下

¹ ある史料の「史的」価値は、それに対する問いかけの水準に決まるのであり、資料に内在するのではない。事実、中世史をはじめとする前近代史研究においては、支持体の材質や書体、成分などの外形的性格への関心が高く、いわゆるコンテンツのみに拘泥するのは「学問の水準が低い」とみなされる。資料の廃棄は、考古学での遺跡の破壊と同様、非学問的な「世間の論理」の問題にすぎない。

の獣皮紙には、その後日談が3人称で記載され、かつての譲渡行為に対する親族の違反行為と、両者の協約が書かれている。ここからは、法行為の証拠として、象徴物件としての木の断片と文書がともに使用されていることが確認される一方で、この時期、この種の法行為がしばしば時を経ずして脅かされていた様子がかいまみることができる。確かなことは、教会側が一貫して、(文字が読めない俗人の意向に関わらず)文書の管理に固執し続けていたことである。

以上のように、ここでは、法行為の締結とはなにか、そのためにはどのような要件が必要なのか等の諸問題自体が(「資料」と「レコード」の関係)、行為と構造の相互依存関係として問われているのである。

他方、業務の現場で日々活用される「レコード」と、組織のなかで別の意味付けを与えられる「アーカイブ」との関係も自明ではない。たとえば、フランス王のアーカイブズとされる「文書の宝物庫」は、アップワードの図式にしたがえば、「アーカイブズ」ではなく、むしろ「アーカイブ」であると考へねばならない。そこでは、王権の利害という組織内論理のなかで、資料の整理と文書目録の理論的整備(アルファベット順索引、一連順配架の確保など)が行われるとともに、会計院の恐らくは影響による、王に属する諸権利のリスト化が進行した。そこには、法関係や諸権利を、個々の原文書によってではなく、二次的に作成される情報目録(王に属する権利リスト)によって管理しようとする志向がかいま見られる。この問題こそ、中世末期以後進行する、業務管理の「合理化」の一つの重要なトピックである(情報を収集、記録(「登録」)する権力の形成)。

最後に、革命のさなかに誕生した近代文書館制度が、市民的公共性ではなく、もっぱら歴史家による古文書探索の場に収斂していた経緯について、本格的な検討が必要のように思われる。すでに革命のさなかから進行した文書館制度の紆余転変、アーキビスト養成システム、大学での歴史教育、アーカイブズ資料をめぐる国家や社会のまなざしやせめぎ合いなど、多様な問題が多く提起されるが、同時に、近世における近代的史料学の形成や資料蒐集事業のあり方等も同じく重要である。アーカイブズ学の歴史的脱構築が求められる。

おわりに

現代アーカイブズ理論には、いくつかの方向性があるが、重要なものとして、一つには脱物理的保管、いま一つは他の資料類型との統合処理がある。いずれも ICT 環境の飛躍的發展を背景とする一方、資料の価値や意味付けを自明視せず、これをアーキテクチャに委ねる発想との親近性が感じられる。レコード・コンティニューム理論は、確かに、古典的なアーカイブズ学を刷新、さらには乗り越える要素を含み込んでいるが、近代的なアーカイブズ学はそもそも、(コンテンツではなく)プロセスとコンテキストの管理を主眼としており、単純なモダンとポストモダンの対立図式を適用することはできない。

西洋中世史料論研究は、行為から記憶までのすべてを統合的に見晴らしながら、資料と、それを生み出す環境や行為との関係に着目して、さまざまな「事実の構成」のあり方自体を問うてきた。レコード・コンティニューム理論をはじめとする現代アーカイブズ学研究の動向は、情報メディア学全般の急速な展開だけではなく、前近代資料研究の立ち位置を検証するための格好の展望台となりうるのである。

付記

本稿は、本報告書所載の以下の論文と密接な関係を有する。合わせてご参照いただきたい。

岡崎敦「アーカイブズ学の現在」(参考文献も相互参照)

清原和之「電子環境下のアーカイブズとレコードキーピングに関する批判的考察」

参考文献

1. 中世史料論關係

- L'autorité de l'écrit au Moyen Age (Orient-Occident). XXXIXe Congrès de la Société des historiens médiévistes de l'Enseignement supérieur public (Le Caire, 30 avril- 5 mai 2008)*, Paris, 2009.
- ANHEIM, E. & CHASTANG, P., Les pratiques de l'écrit dans les sociétés médiévales (VIe- XIIIe siècle), in *Médiévales*, 56, 2009, pp.5-10.
- BARRET, S., *La mémoire et l'écrit: l'abbaye de Cluny et ses archives (Xe-XVIIIe siècle)*, Münster, 2004.
- BARRET, S., Archivistique et tradition documentaire: quelques observations sur le cas clunisien, in *Memini. Travaux et documents*, 9-10, 2005/6, pp.279-303.
- BARRET, S., La mémoire et l'écrit : l'abbaye de Cluny et ses archives (Xe-XVIIIe siècle), dans *Bulletin du centre d'études médiévales d'Auxerre*, 13, 2009, en ligne de: <http://cem.revues.org/index11143.html>.
- BARTHELEMY, D., Une crise de l'écrit? Observations sur des actes de Saint-Aubin d'Angers (XIe siècle), in *Pratiques de l'écrit documentaire au XIe siècle (t. 155 de Bibliothèque de l'Ecole des Chartes, 1997)*, 1997, pp.95-117.
- BERTRAND, P., Cartulaires et recueils d'actes: aux avant-postes d'une «nouvelle diplomatique» (espace français, XIe-XIIIe s.), in *Revue Mabillon*, n.s. 17, 2006, pp.261-267.
- CHASTANG, P., *Lire, écrire, transcrire. Le travail des rédacteurs de cartulaires en Bas-Languedoc (XIe-XIIIe siècles)*, Paris, 2001
- CHASTANG, P., Cartulaires, cartularisation et scripturalité médiévale: la structuration d'un nouveau champ de recherche, in *Cahiers de civilisation médiévale*, 49, 2006, pp.21-32.
- CHASTANG, P., L'archéologie du texte médiévale. Autour de travaux récents sur l'écrit au Moyen Age, in *Annales Histories et Sciences Sociales*, 63, 2008, pp.245-270.
- CLANCHY, M. T., *From Memory to Written Record, England 1066-1307*, Oxford/Cambridge, Mass., 1979
- GEARY, P. J., *Phantoms of Remembrance. Memory and oblivion at the End of the First Millennium*, Princeton, 1994
- GUYOTJEANNIN, O., Les méthodes de travail des archivistes du roi de France (XIIIe - début XVIe siècle), in *Archiv für Diplomatik*, 42, 1996, pp.295-373.
- GUYOTJEANNIN, O., La diplomatique médiévale et l'élargissement de son champ, in *La Gazette des archives*, 172, 1996/97, pp.12-18.
- GUYOTJEANNIN, O., Super omnes thesauros rerum temporalium: les fonctions du Trésor des chartes du roi de France (XIVe-XVe siècles), in K. FIANU & D. J. GUTH, *Ecrit et pouvoir dans les chancelleries médiévales: espace français, espace anglais. Actes du colloque international de Montréal, 7-9 septembre 1995*, Louvain-la-Neuve, 1997, pp.109-132.
- GUYOTJEANNIN, O., «Penuria scriptorum». Le mythe de l'anarchie documentaire dans la France du Nord (Xe-première moitié du XIe siècle), in *Pratiques de l'écrit documentaire au XIe siècle, op.cit.*, pp.11-44.
- GUYOTJEANNIN, O., *Les sources de l'histoire médiévale*, Paris, 1998
- GUYOTJEANNIN, O., La science des archives à Saint-Denis (fin du XIIIe - début du XVIe siècle), in F. AUTRAND, C. GAUBARD & J.-M. MOEGLIN, *Saint-Denis et la royauté. Etudes offertes à Bernard Guenée*, Paris, 1999, pp.339-353.
- GUYOTJEANNIN, O., La diplomatique en France, in *Archiv für Diplomatik*, 52, 2006, pp.479-491.
- GUYOTJEANNIN, O. & POTIN, Y., La fabrique de la perpétuité. Le Trésor des chartes et les archives du royaume (XIIIe-XIXe siècles), in *Revue de synthèses*, 5e sér. 125, 2004, pp.15-44.
- GUYOTJEANNIN, O. & MORELLE, L., Tradition et réception de l'acte médiéval: Jalons pour un bilan des recherches, in *Archiv für Diplomatik*, 53, 2007, pp.367-403.
- GUYOTJEANNIN, O., MORELLE, L. & PARISSÉ, M., ed., *Les cartulaires. Actes de la Table ronde organisée par l'Ecole nationale des chartes et le G.D.R. 121 du C.N.R.S., Paris, 5-7 décembre 1991*, Paris, 1993.

- KOSTO, A. J. and WINROTH, A., ed., *Charters, Cartularies, and Archives: The Preservation and Transmission of Documents in the Medieval West. Proceedings of a Colloquium of the Commission Internationale de Diplomatique (Princeton and New York, 16-18 September 1999)*, Toronto, 2002.
- LE BLEVEC, D., ed., *Les cartulaires méridionaux. Actes du colloque organisé à Béziers les 20 et 21 septembre 2002 par le Centre historique de recherches et d'études médiévales sur la Méditerranée occidentale (E.A. 3764, Université Paul-Valéry - Montpellier III)*, Paris, 2006.
- MORELLE, L., The Metamorphosis of Three Monastic Charter Collections in the Eleventh Century (Saint-Amand, Saint-Riquier, Montier-en-Der), in K. HEIDECKER, *Charters and the Use of the Written Word in Medieval Society*, pp.171-204.
- MORSEL, J., Ce qu'écrire veut dire au Moyen Âge... Observations préliminaires à une étude de la scripturalité médiévale, in *Memini. Travaux et documents publiés par la Société des études médiévales du Québec*, 4, 2000, pp.3-43.
- MORSEL, J., Les sources sont-elles « le pain de l'historien » ?, in *Hypothèses*, 2003/1, 2003, pp.271-286, en ligne de: <http://www.cairn.info/revue-hypotheses-2003-1-page-271.htm>.
- MORSEL, J., Du texte aux archives : le problème de la source, in *Bulletin du centre d'études médiévales d'Auxerre*, Hors série no 2, 2008, pp.mis en ligne le 28 février 2009, en ligne de: <http://cem.revues.org/index4132.html>.
- TOUBERT, P., Tout est document, in J. REVEL & J.-C. SCHMITT, *L'ogre historien. Autour de Jacques Le Goff*, Paris, 1998, pp.85-105.
- ZIMMERMANN, M., L'histoire médiévale coule-t-elle de source?, in *La langue des actes. Actes du XIe Congrès international de diplomatique Troyes, jeudi 11-samedi 13 septembre 2003*, 2003, en ligne de: <http://elec.enc.sorbonne.fr/document189.html#tocto9>

- 岡崎敦「フランスにおける中世古文書学の現在 —カルチュレール研究集会に出席して—」『史学雑誌』102-1、1993年、89-110頁
- 岡崎敦「中世史料学の日本と西欧 —第17回国際歴史学会円卓会議会談録刊行の機会として—」『歴史学研究』706(1998-1)、1998年、36-55、63頁
- 岡崎敦「11世紀北フランスに文書史料の危機はあったか —パリ司教座教会の場合—」『西洋史学論集』37、1999年、1-21頁
- 岡崎敦「西欧中世史料論と現代歴史学」『九州歴史科学』31、2003年、1-20頁
- 岡崎敦「中世末期フランス王の文書管理 —「文書の宝物庫」をめぐって—」『史淵』143、2006年、43-83頁
- 岡崎敦「西欧中世における記憶の管理とアーカイヴズ —パリ司教座教会のあるカルチュレールをめぐって (Liber Niger) —」『史淵』146、2009年、57-89頁
- 国文学研究資料館アーカイヴズ研究系編『中近世アーカイヴズの多国間比較』、岩田書院、2009年
- トック「西欧中近世におけるアーカイヴズ (6-18世紀)」『古文書研究』65、2008年、71-88頁
- モレル「<文書オリジナル>とはなにか —7-12世紀の文書史料に関するいくつかの指摘—」『史学』76-2/3、2007年、89-120頁
- 中村敦子「ウィリアム征服王イングランド証書のなかの「偽文書」 —ウエストミンスター修道院宛証書から—」、國武敬司/直江眞一編『史料が語る中世ヨーロッパ』、刀水書房、2004年、103-122頁
- 松尾佳代子「カルチュレールを読む —12世紀初におけるサン・メクサン修道院とリュージュニャン城主—」『史林』88-2、2005年、115-137頁

2. レコード・コンティニューム理論

- COOK, T., Beyond the Screen: The Records Continuum and Archival Cultural Heritage, paper delivered at the Australian Society of Archivists Conference, Melbourne, 18 August 2000. 古賀崇訳「スクリーンの向こう側

- ーレコード・コンティニュームとアーカイブズにおける文化遺産」、記録管理学会／日本アーカイブズ学会共編『入門アーカイブズの世界 ―記憶と記録を未来に―』、日外アソシエート、2006年、219-250頁
- McKEMMISH, S., Yesterday, Today and Tomorrow: A Continuum of Responsibility, in *Proceedings of the Records Management Association of Australia 14th National Convention, 15-17 Sept 1997, RMAA Perth 1997*, Perth, 1997.
- 坂口貴弘／古賀崇訳「きのう、きょう、あす ―責任のコンティニューム―」『入門アーカイブズの世界』、187-218頁
- McKEMMISH, S., Placing Records Continuum Theory and Practice, in *Archival Science*, 1, 2001, pp.333-359.
- McKEMMISH, S., ACLAND, G., WARD, N. & REED, B., Describing Records in Context in the Continuum: the Australian Recordkeeping Metadata Schema, in *Archivaria*, 48, 1999, pp.3-43;
<http://infotech.monash.edu/research/groups/rcrg/publications/archiv01.html>.
- McKEMMISH, S. & UPWARD, F., Somewhere Beyond Custody, in *Archives and Manuscripts*, 22, no 1, 1994,
<http://infotech.monash.edu/research/groups/rcrg/publications/somewher.html>.
- McKEMMISH, S., PIGGOTT, M., REED, B. & UPWARD, F., ed., *Archives : recordkeeping in society*, Wagga Wagga, 2005.
- UPWARD, F., In Search of the Continuum: Ian Maclean's 'Australian Experience' Essays on Recordkeeping, in S. McKEMMISH & M. PIGGOTT, *The Records Continuum: Ian Maclean and Australian Archives First Fifty Years*, Clayton, 1994, pp.110-130.
- UPWARD, F., Structuring the Records Continuum - Part One: Postcustodial Principles and Properties, in *Archives and Manuscripts*, 25, no 1, 1996, pp.268-285.
- UPWARD, F., Structuring the Records Continuum, Part Two: Structuration Theory and Recordkeeping, in *Archives and Manuscripts*, 25, no 1, 1997, pp.10-35.
- UPWARD, F., The records continuum, in S. McKEMMISH, M. PIGGOTT, B. REED & F. UPWARD, *Archives: Recordkeeping in Society*, pp.197-222.
- UPWARD, F. and McKEMMISH, S., Teaching recordkeeping and archiving continuum style, in *Archival Science*, 6-2, 2006, pp.219-230.
- WICKMAN, D., What's New? Functional Analysis in Life Cycle and Continuum Environments, in *Archives and Manuscripts*, 26, 1998, pp.114-127
- 青山英幸『電子環境におけるアーカイブズとレコード』、岩田書院、2005
- 青山英幸編『電子時代のアーカイブズ学教育』、岩田書院、2008年
- 安藤正人「レコードキーピングとアーカイブズ ―現代の記録管理を考える―」『情報の科学と技術』58-11、2008、535-541頁
- 国文学研究資料館アーカイブズ研究系編『アーカイブズ情報の共有化に向けて』、岩田書院、2010年
- 坂口貴弘「記録連続体の理論とその適用 ―記録の評価選別における機能分析プロセスを例に―」『レコード・マネジメント』47、2004、15-33頁
- 坂口貴弘「オーストラリア連邦政府のレコードキーピング：リテンション・スケジュールと記録処分規定の比較を通して」『レコード・マネジメント』49、2005年、39-56頁
- 中島康比古「レコード・コンティニュームが問いかけるもの」『レコード・マネジメント』49、2005、20-38頁
- 中島康比古「レコードキーピングの理論と実践：レコード・コンティニュームとDIRK方法論」『レコード・マネジメント』51、2006、3-24頁
- ペダーソン「オーストラリアのアーカイブズ(Archivae Australis)：1945年から現在までのオーストラリアのアーカイバル・アプローチ序説」、日本アーカイブズ学会発足準備大会講演、2003年10月4日、於学習院大学。http://www.jsas.info/reports/031004preCon/Lec2/Lec2_F.html